

しかし、共通課題も決定したので、今後は適切な報告者を得ての研究会にしたい。これまでも報告者を求める努力はそれなりにしてきたつもりであるが、実を結ばなかつた。“生活破壊”的問題をとりあげるというと、誰でも「いいテーマですね」とはいつてくれるが、報告を依頼すると、「とても無理ですね」といわれてしまう。事務局の押しが生来足りないかも知れないが、目下難行している。このままの状態で大会を迎えたのでは大変なんで、是非御協力願いたいし、大会での報告に積極的な応募を期待する。二度の研究会での討論にみるように、“生活破壊”ということばの受けとめは人によつてさまざまであるが、会員全体の協力を得てテーマを集約的に盛り上げて行きたい。

今号もまた部厚になつた。関西での第二回研究会での討論を収録したからである。要約すればよいのかも知れないが、どうも整理能力のなきが災いするようである。一つの報告をめぐつての質疑応答を中心としたものなら、報告と討論要旨をのせればよいかも知れないが、色んな角度から各種の発言が出てくる座談会形式の要約は、私の整理能力を超えるようである。とにかく、それぞれの発言が前後との関係で重要な意味を持つてゐるので、あれを拾つて、これを捨てるというのも難しい。いいわけになるが、わかつて頂きたい。

### ◆ 後記 ◆

ところで、関西での研究会での席上、川越会員から私に「徳川時代の農民に“生活破壊”はあつたろうか」というお尋ねがあつた。そのときは余り要領を得たお答えもできなかつたが、その後、考えてみたことを余白を借りて書いてみる。徳川時代の権力である幕府や藩は、ある種の封建権力として、現実に可能であつたかどうかは別として全剩余生産物の収奪を前提として成立していた。もし“生活破壊”といつたことがあるとすれば、領主の収奪が農民の必要生産物にまで喰い込んだときのことであろう。もちろん、いつの時代でもどこまでが必要生産物（労働部分）で、どこからが剩余生産物（労働部分）かという区分は難しい。必要労働部分は概念としてはあつても、定量化できないのは、人間が機械でない証拠である。機械ならば燃料や油がきれれば直ちに動かなくなるが、人間はとかく

「よく粗食に堪える」のである。その結果、寿命を詰めているのか  
も知れないが、その寿命は既知のものではない。

徳川時代に領主の苛斂説求があつたことは否定すべくもない。当  
時の為政者の言として、「百姓と胡麻の油は……」とか、「生かさ  
ぬように殺さぬように」とかいうことが残っているのは、そのこ  
とを示している。しかし、これらのことばは、今日ではともすれば  
「生かさぬように」の方にアクセントがあつたと理解されがちであ  
るが、本来は「殺さぬように」の方にそれがあつたのである。だか  
ら、「絞る」といってもおのずと限界はあつた。その限界を超え  
ば、農民の生活は「破壊」され、その再生産は不可能となり、領主  
も存立の基盤を失なうことになる。結局、農民の手元に萌芽的利潤  
を残すようになる程度でしか収奪できなかつた。検地で石盛や津取  
(免)が定められたといつても、それらは最高の豊作の年にそれだ  
けの年貢を支払うべきであるという最高年貢制の考え方立つもの  
で、作柄に応じて減免があつた。定免制が一般化してからも、飢餓や  
凶作の年には、とくに検見が行なわれたのは、なおこの原則が生きて  
いたのである。かくて、封建的支配は、一切の関係が商品を媒介と  
して現われる資本主義下のそれよりもはるかに牧歌的なのである。

飢餓や凶作にはもちろん農民の「生活破壊」があつた。「人肉相  
喰む」悲惨な状況を示す飢餓の記録も多い。藩の人口の大幅減少を  
示す資料もある。それで宗門帳を使って飢餓や凶作時の人口動態を  
眺めたことがある。そのためには、一つの村に時系列的につながる  
宗門帳が必要であるが、そうした資料は代々名主のような有力な家

が続いた村にしか残っていない。それらによって、私のみた限りで  
は、飢餓や凶作の年と、その前後の年との間に、出生率や死亡率の  
有意の差は出て来ない。近くに一村全滅の伝承を持つ村があつても、  
資料の揃う村では平年通りの人口動態しかみられない。こうなると  
飢餓や凶作の被害も多分に社会的な意味を持つて来る。この点に関  
して、柳田国男が「時代と農政」のなかで、徳川時代の飢餓や凶作  
の惨害が、前半期よりも天明・天保のごとき後半期にはるかに多く  
なる理由の一つとして一定の「社会組織」の「弛緩」(「定本」第  
一六巻、九〇頁)を挙げているのが注目される。すなわち、封建社  
会を「二人の人があれば其間には必ず一人は上、一人は下と云ふ上  
下の階級」があり、「上は自分の下に向つて服従を要求することが  
出来ると同時に、服従させる自分の眼下に對しては自ら進んで保護  
をした時代」(同上、八五頁)とみる柳田は、「主家と従属との関  
係に於て種々なる困窮を救ふ方法、若しくは不幸を防ぐ方法を立て  
なければならぬ社会組織」(同上、八六頁)のあるのが、その時代  
の本来的な姿であると考えていたのであり、その解体もしくは弱体  
化の進んだところで災害が大きくなつたとみてるのである。だか  
ら、飢餓・凶作による直接的な「生活破壊」の前提として、近世的  
な「ムラ」や「イエ」の解体があるわけであるが、果してその解体  
は、生産力の発展の線上に出てくる近代的自我の形式過程とみな  
されてきたのである。もちろん、当時の生産力の発展は、今日のそ  
れのように、生態系を乱すほどのものではなかつたが。(岩本)